

2010 年度政治経済学・経済史学会  
春季総合研究会のご案内

2010 年 5 月 8 日

会員各位

2010 年度春季総合研究会を下記の通り開催いたします。

政治経済学・経済史学会  
〒113-8691 東京都文京区本郷郵便局私書箱 56 号  
TEL & FAX 03-5841-5570/ seikeishi@gmail.com

記

日 時 2010 年 6 月 26 日 (土) 13 時 00 分～17 時 00 分  
場 所 東京大学大学院経済学研究科棟 地下第1教室  
論 題 「森林破壊の歴史－環境問題と循環型社会の可能性－」

問題提起：井上貴子(大東文化大学)

報 告

- 1 「近代ドイツの森林と農地開発」  
藤田幸一郎 (一橋大学名誉教授)
- 2 「蚕糸産業に関連した森林資源利用－山梨県内水源林を事例として－」  
泉 桂子 (都留文科大学)
- 3 「近代中国東北地域における森林消尽過程」  
永井リサ (大阪大学)
- 4 「インドの共同利用地の歴史的変容と森林」  
柳澤 悠 (東京大学名誉教授)

コメント

- 1 「開発と環境の両立の視点から」 石見 徹 (東京大学)
- 2 「熱帯雨林の保全と有効利用の視点から」 増田美砂 (筑波大学)

司 会 松本武祝 (東京大学) ・ 飯田 恭 (慶応義塾大学)

趣 旨

地球環境問題が、21 世紀最大の課題の一つであることは間違いないだろう。近年では、経済学・政治学・自然科学分野の研究者や政治家および草の根の NGO 活動家など様々な論者が環境問題について語り、活発な議論を展開するようになっている。しかし、環境問題の解決と地球環境の将来像への展望については、エコロジー、持続可能性、循環型社会など多様な用語が使用され、これら用語のみが一人歩きし、問題の焦点は拡散する一方である。

世代間－世代内の公平の実現と開発を地球レベルで両立させてゆくことの必要性を説く「持続可能な開発」という概念はすでに国際社会において定着しており、環境問題は国家レベルを超えてグローバルな枠組みで取り組まなければならない課題であるという認識は広く共有されている。しかし、現状を見る限り、環境問題は、先進国対途上国という、

いわゆる南北問題の色彩を色濃く帯びている。たとえば、京都議定書から COP15 に至る気候変動枠組条約締結国会議では、先進国と途上国との間の溝は深まりこそすれ、埋まることはない。特に中国やインドをはじめ CO2 排出量が先進国並みに増加しつつある一部の途上国とアメリカとの間の対立は激しく、これに対して EU や日本は有効な調停案を打ち出すこともできずにいる。京都議定書から 10 年以上も経過したにもかかわらず、COP15 では半歩前進といったレベルにとどまった。

焦点が拡散し、ますますつかみどころがなくなっている環境問題を根底から問い直すためには、環境についての歴史的な検証を行うことが重要なのではないか。環境史という視点は、今日、徐々に注目を集めるようになってきた。しかし、一方で、環境破壊は近代に固有の現象であり、近代以前の社会は循環型であったとする認識も存在すれば、他方では、人間の経済活動は必然的に環境破壊を伴うとする認識も存在するなど、いまだに基本的な認識さえ一致をみるに至っていない。そもそも何をもって「環境」とするのかという定義さえ、研究者の間で共有されていないのが現状である。

そこで、春季総合研究会では、論点をしぼって、今日の地球環境問題で議論されている生態系の破壊、砂漠化の進行や地球温暖化問題に関連の深い森林破壊に焦点をあてたい。森林資源開発が一気に進行したと思われる近代という時代を中心として、森林破壊および保全の実態を歴史的に検証することを課題とする。それによって、将来的な展望としての循環型社会の可能性を念頭に置きつつ、環境問題に関する議論を深めていきたい。

その際、とくに、上述の先進国と途上国との間の緊張関係に着目して、その歴史的な要因について考える必要がある。すなわち、近代・帝国主義・植民地支配と森林資源開発との関係が問い直されなければならない。一般に、近代以降の急速な資源開発は、環境の劣化を伴ってきたといわれる。しかし、西ヨーロッパや日本では、必ずしも近代という時代と森林破壊とが直接的には結びつくわけではなかった。むしろ森林資源の重要性の認識の高まりにつれて、植林等の森林保全が組織的に行われ、近代以前に劣化が進んだ森林資源を回復させたという評価も存在する。他方で、今日、熱帯雨林の破壊や砂漠化の進行に苦しむ途上国側には、植民地期に帝国本国における森林保全への取り組みのツケを廻されるかたちで森林資源の劣化が急速に進み、そうした旧宗主国（先進国）との関係が独立後にも継続されたとする考え方が存在する。

このように議論が交錯する背景には、1980 年代以降に国際的に認知されるようになった「持続可能な開発」の理念と、先進国と途上国の間の経済格差が一向に是正されないという現実が存在する。そこで、論点を整理していくためには、以上のような開発や経済格差の問題と森林問題とをいったん分けて考えるべきだろう。そのうえで、近代の帝国本国/先進国および植民地・従属国/途上国における森林破壊あるいは保全の実態を把握し、通時的な視点から再検証することが必要であろう。それによって、森林保全と森林資源開発の両立、さらに循環型社会への新たな展望を開くことが可能ではないだろうか。

以上の問題意識をふまえて、以下の点を討論の要点として提示しておく。

1. 森林破壊は近代という時代に固有に進行した現象なのか。
2. 植民地/途上国および帝国本国/先進国における森林破壊/保全の歴史にいかなる連関性が見いだせるか。
3. 森林保全と経済開発はいかにして両立可能なのか。

なお、政治経済学・経済史学会では、これまで環境問題が継続的には取り上げられてこなかった。しかし、経済活動と環境との関係を歴史的に検証することは今日的な課題でもあり、本学会の特徴を生かしつつ、有益な提言ができるのではないかと考えている。

\*報告フルペーパーが事前に学会ホームページ(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/seikeisi/index.html>)に掲載されますので、予めご参照ください。